

優秀修士論文概要

「声」をいかに聞き取るか

——石牟礼道子『苦海浄土』をめぐる——

堤 悠 平

本論文は、公共性論および、作家石牟礼道子の作品『苦海浄土』を通して「声」をいかに聞き取るかという問いについて答えることを目的とする。まず第1章の第1節では、上野千鶴子による当事者論を、第2節では宮地尚子による「円錐島モデル」および「環状島モデル」の検討を通して、問題の所在および、本論文における問題提起を行なう。上野は障害者自立支援運動という文脈のもと、障害を持つ人びとの自己決定権が医師や家族といった第三者に奪われてきたことを問題として捉えたうえで、「ニーズ」を起点とした「当事者」のあり方を提起する。さらに上野は後年、「当事者である」と、「当事者になる」との区別をより前面に打ち出し、後者の「当事者になる」というプロセスをより重視する議論へと当事者論を発展させる。以上の上野の当事者論は、積極的に「当事者になる」ことができない人びとを「当事者」として見るができないという川英友の指摘を踏まえ、みずから積極的に「当事者になる」ことができない人びとの「声」を考えるために、宮地による「円錐島モデル」および「環状島モデル」を援用して考察を進める。

「環状島モデル」とは、あるトラウマの出来事に対する発話力、あるいはその出来事に対するポジショナリティを描写することを目指した理論的モデルである。環状島モデルにおいては、ある出来事の当事者であればあるほど、その出来事について語ることが困難になるという事態を理論的モデルとして提示している。環状島モデルに対する考え方として宮地が提起するのが「円錐島モデル」である。円錐島モデルは、環状島モデルとは逆に、ある出来事の当事者であればあるほど、その出来事について語ることができるという考え方である。宮地は、円錐島モデルを広く社会のなかで支配的な考え方であるとして批判したうえで、環状島モデルを用いて「発話することのできない当事者」に目を向けることを促す。

上野の当事者論は宮地の言う円錐島モデルに近似したものであると言える。どちらも、出来事への距離と、当事者性を正比例するものとして捉えているからだ。しかし、環状島モデルを踏まえると、発話することのできない当事者の人びとの存在が明らかになる。そして、そのような人びとは、「当事者になる」ことを重視する上野の当事者論では捉えきることができない。声を発することができない当事者の人びとの「声」をいかに聞き取るか、という問いがこのように浮上してくる。

以上の問いについて考えるために、本論文では作家石牟礼道子の作品『苦海浄土』を取り上げる。第1章第3節では、『苦海浄土』がテーマとする、戦後日本社会における最も重大な公害事件のひとつである水俣病事件の概要と、『苦海浄土』に着目する意義について述べる。『苦海浄土』に着目するうえで、大きな示唆をもたらすのが、「悶え神」という言葉である。水俣地域に伝わる言葉で、「他者の苦しみや悲しみを自分のこととして受容する人」のことを指す言葉である。石牟礼は「悶え神」として、水俣病の患者の人びとの「声」をすくい上げたのではないだろうか。このような視点のもと、本論文では『苦海浄土』に着目した分析を行なう。

第2章では公共性に関する議論を概観する。第2章第1節では、H・アーレントとJ・ハーバーマスの公共性論および、それを批判的に捉えた齋藤純一の議論をもとに、国家的公共性と市民的公共性について概観していく。齋藤は、戦後の日本社会においては長らく「公共性」が否定的な含意を持った言葉であったことを指摘する。

国家的公共性に對置される公共性として、市民的公共性がある。市民的公共性の議論に先鞭をつけた論者として、アーレントとハーバーマスの名前が挙げられる。アーレントはその公共性論において「現われ (appearance)」と「複数性 (plurality)」を重視した。いっぽうでハーバーマスは「コミュニケーション的行為」を通じた討議による合意形成を、公共性論の中核に据えた。

第2章第2節では公共性論に内在する排除の機制について見ていく。齋藤は、公共性には、公開性というその条件にもかかわらず、「排除と周辺化の力」が働いていることを指摘する。齋藤の指摘をもとに、アーレントとハーバーマスの議論に、どのような排除の機制が内在しているかを検討する。その結果、アーレントの議論においては「他者から見られ、聞かれる」という「現われ」を重視するがゆえに、またハーバーマスの議論においてはコミュニケーション的行為が重視されるがゆえに、排除の機制が不可避免的に内在することを見る。公共性論に排除の機制が内在している以上、排除をなくすことは原理的に不可能である。必要とされる視座は、公共空間には必然的に排除が伴うということを認識したうえで、排除された存在/されている存在に目を向けることではないだろうか。このような問題意識のもと、第3章と第4章では、水俣病事件に焦点を当てた考察を行なう。

第3章では水俣の地域社会における社会階層について論じる。第3章第1節では、市の人口に占める割合が1%弱にもかかわらず、水俣病患者を職業別で見た際に漁民の人びとが70%強を占めるという事実に着目し、論を起す。第3章第2節から第3節では、チッソが水俣の地域社会に対して影響力を持つに至る歴史を概観する。

以上を踏まえたうえで、第3章第4節から第5節では、水俣の地域社会内における社会格差の格差構造を見る。水俣の地域社会内部には、チッソの工場に勤務する人びとと、そうではない農漁民の人びととの間には、社会的・経済的な格差が存在したことを飯島の議論を参照しながら示す。また農漁民の人びとの間にも農民を上部とする格差構造が存在し、それが歴史的要因に起因することを岡本達明の議論をもとに示す。

第4章では水俣病事件と戦後日本社会の関係について見る。水俣病の公式確認が1956年であったのに対し、政府による公害認定は1968年であった。政府による対応・救済が遅れた要因について、栗原彬が「国の生産力の増大が国民を豊かにし、幸福にするというイデオロギーと政策」として主張した「生産力ナショナリズム」概念を援用し考察する。高度経済成長と水俣病事件をはじめとする公害病はどちらも生産力ナショナリズムに由来するという「生産力ナショナリズムの二重性」を主張する。

続く第4章第2節では水俣病事件における認定制度について概観する。認定制度とは、水俣病患者の人びとに対する公的救済措置の根幹となる制度である。しかし、認定制度に基づく公的救済措置は、水俣病の実態からは極めて乖離していることがこれまでに繰り返し指摘されている。先行研究の検討を通して認定制度と実状の乖離を見、その乖離について考察を行う。

第4章第3節では生産力ナショナリズムや認定制度について、M・フーコーの権力論を基に考察を行なう。第4章第4節では、J・パウマンが第二次世界大戦中のナチスドイツによるユダヤ人虐殺について行なった考察をもとに「近代と水俣病」について議論する。水俣病事件は、合理性を追求する近代社

「声」をいかに聞き取るか

会の特徴と不可分であることを指摘する。

第5章では石牟礼道子『苦海浄土』の分析を行なう。第5章第1節では、アーレントにおける「見棄てられた境遇」と、環境社会学者の飯島伸子による「被害構造論」について見る。アーレントの言う「見棄てられた境遇」とは、「他者のアテンション、他者の応答が失われた状態」のことをいう。また飯島による被害構造論は、公害事件などによる被害を一個人にとどまるものではなく、家族や地域社会といった社会関係に被害をおよぼすものとして捉える視角を提起する。水俣病をめぐっては地域社会内において、あるいは水俣—国家という位相において、「声」が聞かれないという事態が生起していることを見る。

第5章第2節ではS・フェルマンとG・アガンベン証言論を検討する。フェルマンは、第二次世界大戦中のナチスドイツによるユダヤ人虐殺の考察を通して、「出来事のコアに在るからこそ、証言することが不可能になる事態」である「証言の不可能性」という概念を提起する。フェルマンの証言論を引き継いだアガンベン証言論においては、「証言の閾」についての考察がなされる。アガンベンは「証言の主体」が同定できない事態がユダヤ人虐殺をめぐって生じていることを指摘し、さらにこの点において、証言を証言たらしめる要素が存在するとアガンベンは述べる。さらに、第2節第3項から第4項では証言論と環状島モデルを突き合わせた考察を行なう。

第5章第3節では石牟礼道子『苦海浄土』の分析を行なう。第1項では『苦海浄土』における「語る主体の曖昧性」を見る。『苦海浄土』第1部の第3章「ゆき女きき書」に着目し、語り手とおぼしき著者の石牟礼と、登場人物である坂上ゆきの語り混交の様子について見る。この「主体の混交」について、渡辺京二が指摘した「患者の言い表していない思いを言葉として書く」という石牟礼が『苦海浄土』において取った方法について考察を進める。第2項では石牟礼が取ったこの方法について、「悶え神」という言葉を再び鍵として読み解いていく。第3項ではふたたび環状島モデルを援用しながら、石牟礼は『苦海浄土』において、「〈内海〉の〈水位〉を仮想的に上げる」ということを行なったのではないかと主張する。これにより「文学作品」というかたちをとり、〈内海〉に沈む人びとの「声」を〈尾根〉、あるいは〈外海〉へと届けることが可能となった。それは石牟礼が〈内海〉に沈む人びとの「声」を悶え神として「聞く」ことで、読者も彼らの声聞き、読むことが可能になったということにほかならない。

優秀修士論文概要

寛容の虚実

—— 日本における同性愛に対する意識の形成と変化 ——

中 滯

1. リサーチ・クエスチョン

同性愛者の権利保障が不十分な中で同性愛嫌悪が顕在化する日本のコンテキストにおいて、「日本は同性愛に寛容である」という根拠のない言説（以下、『寛容』言説と呼ぶ）を可能とする社会的条件は何か。本研究は、この包括的な問いに対し、政治・社会意識の構造や変化の検証を通じて解明を試みる実証研究である。具体的には、次の3つの分析課題に取り組んでいる。1つ目は「同性愛に対する意識の規定要因は何か」、2つ目は「同性愛に対する意識はどのように変化してきたのか」、3つ目は「同性愛をめぐる政治は日本にも存在するのか」である。

2. 修士論文の構成と主な知見

修士論文は6つの章で構成されている。第1章では、同性愛をめぐる日本の研究状況を概観し、本研究を貫く筆者の問題意識を提示した。まず、歴史社会学・社会史研究の成果に基づいて「寛容」言説を批判的に検討し、本研究の包括的な問いを立てた。次に、同性愛に対する意識を研究対象に据えること、そのための理論と方法論について、日本におけるセクシュアリティ研究の展開や社会運動の事例を踏まえて検討した。具体的には、米国のフェミニズム政治・社会理論家であるアイリス・マリオン・ヤング (Iris Marion Young) が2011年の *Responsibility for justice*, Oxford University Press (岡野八代・池田直子訳『正義への責任』岩波書店、2014年) で論じた「構造的不正義 (structural injustice)」を参照することの有効性、大規模社会調査データを用いた量的研究の妥当性を主張した。

第2章では、同性愛に対する意識に関する先行研究をレビューした。そこでは、研究状況にみられるギャップや既存研究の問題点を指摘し、上述の3つの分析課題を設定した。

第3章から第5章がこれら3つの実証分析であり、本研究の議論を支える柱である。第3章では、同性愛に対する意識と個人の属性との関連を検証した。日本版総合的社会調査 (Japanese General Social Surveys) の2000年、2001年、2008年の3時点の個票データを用い、重回帰分析を行った。分析の結果、肯定的な意識を示す属性として女性、高学歴、都市居住、専門職、否定的な属性として男性、地方居住、キリスト教が挙げられた。日本では宗教との関連は弱いと考えられがちだが、欧米と同様、キリスト教への信仰と同性愛嫌悪の関連が示された。他方、欧米と比較して異なるのは、社会階層との関連である。米国とカナダを対象とした研究では、専門職や管理職といった職業的地位と肯定的な意識との関連が示されているが、そのような関連は専門職においてのみ確認された。

第4章では、同性愛に対する意識の長期的な変化の要因を、男女別・年代別に検証した。具体的には、世界価値観調査 (World Values Survey) の Wave 1 (1981年) から Wave 6 (2010年) までの6時点の

個票データを用い、線形要因分解（linear decomposition）によって分析期間の意識変化をコーホート交代と同一コーホート内変化に分解した。1980年代、意識は否定的な方向に変化しており、その変化はコーホート交代の正の効果をコーホート内変化の負の効果が上回ることで生じていた。なお、このような効果は男性にのみ表れていた。1990年代、意識は分析期間内で最も大きく肯定的な変化を示した。変化の約77%は同一コーホート内変化によって説明でき、これは男女に共通する結果であった。2000年代、意識は肯定的な変化を示すものの、1990年代に比べて鈍化した。この間の変化は約70%がコーホート交代によって説明され、同一コーホート内変化の寄与は約30%に縮小した。同一コーホート内変化の寄与の縮小は男性で顕著であった。米国を対象とした研究と整合的に、同性愛に対する意識が肯定的に変化する局面では同一コーホート内変化の役割が重要であることが実証された。一方、日本では2000年代以降、男性の意識変化が女性に比べて緩慢であることが明らかとなった。

第5章では、同性愛に対する意識と投票行動の関連を検証した。本章では、国際社会調査プログラム（International Social Survey Programme）の2018年「宗教」調査のデータを用い、2017年衆議院議員選挙における投票政党について2項ロジスティック回帰分析を行った。棄権率が回答者全体の32%、投票政党として自由民主党が53%を占めるデータの特徴により、投票政党の選択に焦点を絞り、自由民主党と立憲民主党のみを分析の対象とした。分析の結果、自由民主党への投票と同性愛に対する否定的な意識との間に有意な関連が示された。一方、立憲民主党への投票と同性愛に対する意識との間には関連が確認されなかった。これについては、同性愛者の権利保障が政治的な争点として成立していないことを反映する結果であると解釈した。

第6章では、本研究の結論を述べ、限界と今後の研究について議論した。まず、日本における同性愛嫌悪の構造は、日本社会の権力構造と密接に結びついている。特に否定的な意識を持つ傾向のある高齢者や男性といった属性の人びとは、日本社会を支配し、権力を行使する側である。このことから、「寛容」言説を可能とする社会的条件の1つとして、男性中心的・異性愛中心的な権力構造の根強さが指摘できる。しかし、本研究の結論はそれだけではない。2000年代の日本では、特に男性の意識の肯定的な変化が停滞し、その後も長らく同性愛者の権利保障を積極的に支持する意識が不在であったと考えられる。そのような状況の中で浮かび上がるのは、同性愛嫌悪に対抗する政治の困難である。日本では、同性愛に対して肯定的な意識を持つ人びとが政治参加に積極的ではない。同性愛嫌悪に対抗する政治が不在のままでは、同性愛者の困難が政治によって解決される可能性は限りなく小さいものとなるだろう。

さらに、ヤングの構造的不正義の視座からは、同性愛をめぐる日本の政治・社会意識と同性愛者が直面する困難とのつながりが見出せる。構造的不正義とは、容認されている規範や規則の範囲内で、人びとが日常的にその維持と再生産に関与する不正義を指す。この視点を取り入れると、たとえば、2000年代の意識変化の停滞について、日本の意識が全体として既存の権力構造の維持と再生産に与していたという解釈が可能となる。2010年代後半の政治参加の状況についても、政治を不要とするマジョリティが、政治を必要とするマイノリティを抑圧する構図が読み取れる。日本において同性愛者が直面する困難は、一部の人びとの否定的な意識によってのみ生じているのではなく、現状の維持と再生産に関与するあらゆる人びとにその責任が分有されていると考えられるのである。

本研究を通じて見えてきた最も重要なことは、「寛容」の虚と実の両方である。それは、日本における同性愛嫌悪への対抗をめぐる困難と可能性の両方を示している。男性中心的・異性愛中心的な権力構造が温存されたままの「寛容」は虚構であり、同性愛嫌悪への対抗は困難である。しかし、本研究から

は同性愛に対して肯定的な意識を持つ社会層が存在している実態も明らかとなった。問題は、このような層が既存の権力構造の下で抑圧されていることである。マイノリティがより多くの権利を自らの手に獲得することは、既存の権力構造の揺らぎであると同時に、既存の権力構造を解体するための触媒ともなり得る。ここに、同性愛嫌悪への対抗の可能性を見出せるのではないだろうか。

3. 限界と今後の研究

本研究の主な限界として、次の2点を指摘した。1つ目は、「寛容」という概念をめぐるものである。本研究では、肯定的な意識を「寛容」、否定的な意識を「不寛容」の一側面を表すものとして操作化してきた。しかし、「寛容」とは条件付きの受容であり、それを与える側と与えられる側の間には非対称的な権力関係が存在するという議論もある。このように複雑性の大きい概念を、意識の肯定・否定だけで操作化するのには限界があった。もっとも、意味や表象を量的研究で検討することは難しい。この限界を乗り越えるには、本研究とは異なるリサーチ・デザインが必要である。

2つ目は、政治・社会意識を読み解くための理論に関するものである。ヤングの構造的不正義において重要なのは「責任の分有」という考え方である。本研究では、男性中心的・異性愛中心的な権力構造の根強さが、「寛容」言説を可能とする社会的条件の1つであると結論づけた。しかし、マイノリティの困難に対する責任は社会に分有されていると考えれば、マイノリティもまた、自らの困難に対する責任を有していることになる。これは、既存の権力構造を解体するために、マイノリティが連帯することの重要性を示唆している。責任の分有から連帯への連続性を捉えるこのような理論と実証との接点を追究することは、さまざまなマイノリティに対する政治・社会意識研究のこれからにおいても意義のある試みとなるのではないだろうか。これについて議論を深められなかったのは、本研究の大きな限界である。

最後に、今後の研究の発展に向け、量的研究のさらなる蓄積が必要であるのに加えて、質的研究やミックスド・メソッドからの接近が求められることを指摘した。近年の日本では、性的マイノリティを取り巻く政治・社会状況の変化が目まぐるしい。人びとがこのような変化をいかに経験しているのか、変化の諸相をいかに理解しているのかといった課題に迫ることは、マイノリティと政治・社会意識をめぐる実証研究の発展に貢献すると考えられる。